二輪の恋　―サンプル―

1

高梨義人（たかなしよしひと）がプランの追加を決めたのは、店にかかってきた一本の電話がきっかけだった。

『あの、障がいがあっても受け付けていただけますか』

ゲイ向け風俗店で働き始めてもうすぐ十五年。恥ずかしながら障がい者の性について考えたことはほとんどなく、そういうボランティア団体があるらしいと認識するにとどまっていた。しかし考えてみれば、障がいと恋愛対象の性別は関係がない。同性愛者向けの風俗はそれでなくても数が少ないのに、障がい者となればさらに門は狭くなっているだろう。

自分の視野の狭さに嫌気を起こしながら、高梨は声を絞り出した。

「当店はゲイ向けですが、お間違いないでしょうか」

これは、初めての客には必ず訊いていることだ。たまに間違えてかけてくる人や冷やかしでかけてくる人がいる。

それにしても、自分は今までどうして障がい者の性について考えてこなかったのだろう。客を喜ばせる方法やイベントはたくさん考えてきたというのに。

相手は高梨の動揺に気付いていないのか、緊張した声のまま答えた。

『はい、あの……ゲイ、なんですけど……』

「失礼いたしました」

ゲイという言葉を聞いていくらか鼓動が落ち着いた。送話口を顔から離し、相手に悟られぬよう深く息を吐く。

「――失礼ですが、どのような障がいをお持ちでしょうか」

丁寧に尋ねたつもりだった。しかし、数瞬の間があった。

『……車椅子を使っています』

声から緊張が消えていた。かわりに怒りとも落胆ともつかない硬い音が高梨の胸を染めた。どうやら、気を害するようなことを言ってしまったらしい。障がいの内容を訊かれるのが嫌だったのか――？　しかしそれがわからなければ答えようがない。

「かしこまりました。当店のプランはご存じでしょうか」

頭の中で、店前から個室までのルートを確認する。段差は――あっただろうか。見てこなければ、わからない。
断ろうという考えはなかった。もし段差があるようなら抱き上げてやればいい――しかし、もし相手が大柄だったらどうしようか。頭の中で目まぐるしく疑問や不安が巡っていく。
『はい。あの……ネココースでお願いしたいです』
「ネコですね。かしこまりました。大変恐縮ながら、当店ではこれまで車椅子の方をご案内したことがございません。気兼ねなくお楽しみいただけるか、段差や部屋の造りなどの確認をして、改めてお電話を差し上げてもよろしいでしょうか」
極端に言えば、その辺りのことはどうにでもできた。問題なのは、接客できるというプレイヤーがいるかどうかだった。
「あ……ありがとうございます。あの……」
泣きそうな、ほっとしたような声だった。声色がころころ変わる。頭の中に、小柄でかわいらしい感じのネコが浮かび上がった。
『はい』
「指名、なんですけど」
『はい』
「お兄さんは……だめですか？」

2

クラブ・シェリの控室。
テーブルの上には開きっぱなしのエロ本。封の空いたコンドームの箱。壁際のロッカーのうち半分は中途半端に開いている。いつもだったら片付けろと声を荒げるところだが、今日だけはそんな気にはなれなかった。
「店長。これ、緊張をほぐす薬です」
うなだれていた高梨が顔を上げると、正面に大和が立っていた。店のタチナンバーワン。差し出された手には、水色の小さなケース。フィルムには「よいこのらむね」。
「……ありがとう」
どこが薬だ。からかわれている。しかし怒ったふりをする気にもなれないくらい、緊張で胃が潰れていた。
「断ればよかったのに」大和が隣に腰を下ろす。

「そんなことできないだろ……」
彼――予約名を佐藤と言った――は、真剣だったのだ。それに、高梨だってすぐにＯＫと答えたわけではない。自分は受付や事務の担当であってプレイヤーではないこと、だから満足させられるかわからないことははっきりと告げた。しかし佐藤――確実に偽名だ――は、写真も載せていない自分をどうしてと問う高梨に、嬉しかったから、と言ったのだ。
「これまでたくさんのお店に電話をしたんです。でもみんな困ったように濁したり、『無理です！』と電話を切られたりで。だから、嬉しかったんです。話し方も……優しいですし」
照れたような話し方がかわいかった。それだけで好みだ、と感じてしまうくらいに。
「俺たちはどんな外見のお客さんでも仕事だってそれなりに割り切れますけど……できるんです？」
大和がラムネを口に放り込んだ。くれると言ったくせに、自分で食べた。
「わかんないけどさ……」
起たなかったらどうしよう――でも電話のときはそんな心配は浮かばなかったのだ。だって、話し方がかわいかったから。そんなことを言えば「ちょろい」と言われそうなので絶対にこいつにだけは言わないが。
「店長の好みはわかんないですけど、その正反対だったら？」
「そういうこと言うなよ……」
余計に胃が痛くなる。自分でも、いい年して見切り発車したことを悔やんでいる。もう三十二だ。こんな年になってもまだ高校生みたいなことをしている。いや、普段はしっかり者だと自負しているが――そんなことはどうでもよくて、もし佐藤を傷つけるようなことをしてしまったらどうしよう、という心配に頭の中が切り替わる。それでなくても電話で一度、不快な思いをさせてしまったようなのに。
（それでも指名してくれたんだよな……）
高梨を指名したいと言ったときの、恥ずかしそうな声が耳から離れない。きっとプレイ中もあんな声でおねだりをするんだろうなと思ったらドキドキして、家で数回勃起した。
「まあ……どうにかなりますって」
不安をあおった張本人は、高梨のあまりの気落ち具合にいじるのをやめたようだった。苦笑しながら、気安くパンと背中を叩いてくる。
「それにほら、これからは障がい者コースを作るんでしょう？　俺た

ちだってちゃんとやりますし。勉強だってちゃんとしてますよ」
「ああ……ありがとう」
うちのスタッフはみんないい子だ。この界隈でも人気のある店だが驕りがない。それに、障がいを持ったお客さんを受け入れたいと高梨がミーティングで投げかけたときも、全員が「いいと思う」と頷いた。もちろんみんな、それが簡単なことではないことはわかっていた。一口で障がいと言っても幅広い。今回は歩けないということだけだったのでスムーズに受け入れることができたが、もし酸素吸入や痰の吸引を必要とする人だったらこんなに早く受け入れることはできなかっただろう。
「そうだ、看護師資格持ってるやつ見つけましたよ」
「本当か」
何かあったときのために知識のある人間を置く。それは全員が必要だという意見で一致した。できれば介護資格を持っている人も欲しい。しかしゲイ風俗ということもあるし、そういう職業の人はそもそも多忙だ。なかなか見つからないとわかっていたので、それまではお客さんと話し合いながら手探りでやっていこうということになっていた。だからこんなに早く見つけてくれた大和にはその労を多として何か奢ってやらなければならないだろう。
ポリポリと小気味いい音を立ててお菓子を食べる大和を横目で見る。
(焼き肉は……破産するまで食いそうだな)
ランクを下げ、ラムネをケースで買ってやろうと決めたときだった。
「店長！」カウンターにいたスタッフが控室のドアを開けた。「佐藤様が下に到着されたそうです」
「ああ、ありがとう」
鼓動が速くなりすぎて息苦しい。まさかこの年でプレイヤーデビューすることになるとは。しかしあるのは緊張だけ。不快感はないので、もう腹をくくるだけだ。あちらだって初めてだと言っていたし、こちらも初めてだと伝えてある。初心者同士手探りで……それがいい効果をもたらすこともあるだろう。
持ち前のプラス思考で自分に気合いを入れ、腰を上げる。一歩踏み出したところで、思い直して振り返る。
「……くれるんじゃなかったのかよ」
手を差し出すと、大和は盛大に笑った後で高梨の手のひらに白い粒を三つ転がした。

〜〜〜〜

「プレイ準備はどうしましょうか」
問いかけに、佐藤はきょとんとした顔で首を傾げた。
「シャワーのことですか。一応、家では浴びてきましたけど……車椅子で浴室のドアの前まで行ければ浴びられます」
「ああ……いえ、挿入のための準備が」
山口の前で生々しいかと思ったが、必要なことだ。それに辱めてしまうことになっても、山口がいるうちの方が逃げ場があるだろうと思った。
「え……あ、俺がしたらいいんですか？」
「……はい？」
「えと……その、高梨さんのを」
瞬きを繰り返すと、佐藤も同じ顔をした。二人で黙り込むと、山口が口を開く。
「あの、プランありましたよね？　佐藤くんは何を？」
デリケートなところだ。言っても大丈夫なのかと佐藤に視線を向けたが、彼は山口の方を向いていた。
「え、ネココース？　だけど」
「ネココース……」
「はい、そのように――」
その場にいる全員が「もしかして」と思い至った。店の人間として、高梨が口を開く。
「当店のネココースはご来店されたお客様がネコ……つまり、プレイヤーに抱かれるコースですが」真意を問わずとも、佐藤の表情を見てわかった。言わせてしまう前に笑顔を作る。「すぐにネコをご用意いたします。お好みはございますか？」
「あ……えっと、え、すみませんっ！」
佐藤が真っ赤な顔をがばりと下げた。そんなことをしては落ちてしまうのでは、と焦って駆け寄って手を伸ばしたが、車椅子に慣れているらしい彼はびくともしていなかった。それどころか、落ちないようにと差し出した高梨の手に驚いたようで、丸い目で見上げてくる。
「あ……すみません。ありがとうございます」
ふわっと花が咲いたような笑顔に思わず息を呑んだ。
「いえ――初めてのご来店ですから、念のため確認すべきでした。申し訳ございません」

自分はネコだと思われていたのか――？
でも、まさか。だってネコに間違われたことは一度もない。まさかタチネコを逆に覚えている――それはないか。
「この時間に空いているネコの一覧をご用意いたしますね」
「あ……あの」
「はい？」
携帯を取り出して事務所にかけていると、佐藤が口を開いた。しかしすぐ口を閉じたので、電話が終わるのを待っているのだと判断して口早に指示を出し、携帯をしまう。
「失礼しました。いかがなさいましたか」
「あの……高梨さんはネコじゃない……んですよね？」
「……はい。申し訳ございませんが」
これまで一度もネコをしたことはない。そもそも、かわいいネコしか好きになったことがない。
「そう……ですよね」
もしかして、本当にネコだと思われていたのだろうか。タチネコは外見で判断することではないが、高梨は年も佐藤より上だし、かわいいタイプでもない。人の好みはそれぞれだが自分がタチの好みになるとは思えなかった。これまで告白だってネコからしかされたことがない。
「……あー、私、外に出てます。今って廊下に出ても大丈夫ですか」
気を遣ったのか、山口は高梨が頷くのを見てそそくさと部屋を出て行った。それと入れ替わりで、受付スタッフがネコの一覧とお茶を持ってくる。
「お待たせしました。どうぞ」
部屋に入った直後の、ネコの一覧表要求。スタッフは笑いをかみ殺していた。きっとチェンジを希望されたと勘違いして馬鹿にしているのだ。終わったら説教してやると思いながら「ありがとう」とにこやかに笑うふりをして受け取る。
ドアを閉めて振り返ると、佐藤は明らかにしょんぼりとうなだれていた。
「……申し訳ございません。私の確認不足で」
近寄りながら言うと、佐藤はハッとした様子で顔を上げた。
「とんでもないです。すみません、ちゃんと読んだつもりだったけど……緊張してて」
「初めてのことは何でも勇気がいりますよね。他のお客様も同じような感じですよ」

「そうなんですか」
あまり話していては時間が伸びてしまう。カウントが始まるのはプレイヤーが部屋に入ってからだが、いつまで山口を待たせていいのかもわからなかった。しかしそれでももう少し話してみたいと思う何かがあった。安心させてやりたい……が、近いだろうか。外見はまるでタチなのに、緊張した様子や楽しそうな様子がかわいく見えた。
「はい。緊張しすぎて予約の時間を忘れてしまった、という電話をいただくこともありますよ」
「そうなんですね」
佐藤の体から目に見えて力が抜けた。失敗したのが自分だけじゃないとわかると、人は安心できるものだ。
「佐藤様の場合はただの勘違いですから」
せっかく来店してもらったのだから、少しでも気分を落とさずにプレイに入らせてやりたかった。
「どういった子がお好みでしょう。実は佐藤様からお電話をいただいた後、障がいをお持ちの方向けのコースを作ることにしたんです」
「え……」
「みんな未経験なので、佐藤様のお望みをすべてスムーズに叶えられるかはわかりませんが……全員でミーティングをして、介助体験にも行って勉強はしています。なので、ここに載っている子は誰でもお選びいただけます」
「本当に……？」
「はい。指名で埋まってしまっている子や本日がお休みの子もおりますから、ホームページに載っている全員がいるわけではないですが――」
「そうじゃなくて」慌てた様子で佐藤が口を挟んだ。「その……プランを作ったりとか、そういうことまでしてくださったんですか」
「あ――ええ、はい。まだ勉強不足ですから障がいを持つすべての方にお越しいただくことはできませんが……四肢や目、耳が不自由な方なら今の段階でもお越しいただけると思っています。いずれは看護師や介護士を在籍させ、性の自由が利かない皆様にお楽しみいただけるようにしたいと思っています」
「でもここはゲイ向け風俗ですよね」
「はい」
「障がいを持つゲイって少ないと思うんですけど……それなのに？」
「確かに多くはいないかもしれませんが、だからといってないものとしていいわけではないと思いました。恥ずかしながら佐藤様からお電

話をいただくまではそういうことは一切考えたことがなくて。でも気付いてからはどうにかしたいと考えるようになりました。障がいをお持ちの方だって、性的な思考がどういったものだって、行為をしたいという気持ちは同じですから」

「高梨さん……」

「そういうわけで、大変恐縮ですが佐藤様はお客様第一号なので、今後の当店のためにも忌憚なきご意見をお聞かせくださいね」

恩着せがましいことを言うつもりは毛頭なかった。しかしこういう言い回しで伝えれば極力遠慮させずに佐藤の気持ちを聞けるような気がしたのだ。

「すごく嬉しいです。障がい者だからって諦めて……その次はゲイだからって諦めてました」

「もう諦めないでくださいね。これは無理かなと思うことがあっても、まずはご相談ください」

これまでもゲイだとか風俗だとか、そういう外野からの野次はあったが、誠意を持って仕事をしてきたつもりだ。ただいやらしいことをするためだけの場所じゃなく、癒しや楽しみのような、プラスアルファがある場所にしたいのだ。

「嬉しいです」

佐藤が目元をこすった。きっと今までいろんなことを諦め、我慢してきたのだろう。

そんな彼の肩に触れたのは無意識だった。丸まった背中をさすり、ヘッドボードに置かれたティッシュを差し出す。

「いたらないことも多いかもしれませんが、たくさん楽しんでいってくださいね」

「はい！」

涙のにじんだ笑顔が眩しい。胸がきゅんと締め付けられるような感覚を覚える。しかし彼はタチだ。なぜ――自分の心に戸惑いながら、ごまかすようにファイルを開く。

「私が言うのもなんですが、うちの店のスタッフはタチもネコもみんないい子です。明るいとかおとなしいとかの違いはありますが、性格はいいので安心して選んでください」

はい、と言って佐藤がお茶を飲んだ。

「顔は写真、身長やペニスのサイズはここに記載されています」

「そんなものまで……！」

「はい。うちはとにかくお客様にお楽しみいただくというのがモットーなので」

「すごい……あ、これ……」
佐藤が指したのは好きなプレイ内容の記載欄だった。今見ているページのネコは「お尻を叩かれるのが好きです」と書いている。「甘えん坊なのでお仕置きの後はたくさん抱きしめて甘やかしてください」とまで。
「いろんなお客様がいらっしゃいますから。それにスタッフもいろんな趣味を持っています」
「高梨さんも……？」
まさか自分のことを訊かれるとは思っていなかったので驚いた。しかしすぐに頭を切り替える。
「もちろんです」

〜〜〜

のりの効いた真っ白なシーツ。用途のせいでシミがつきやすいものだが、落ちない汚れがついたものはすべて処分。他の人間の痕跡を感じさせないのが風俗の基本だ。
ベッドの上に、二人の裸体。腰にタオルを巻いているのは、この場に高梨がいるからだろう。あまり見ないよう意識しながら視線を巡らす。目についたのはベッドのすぐ横に置かれた車椅子だった。
体位変換をする際に邪魔にならないよう、少しだけ車椅子の場所を変える。シミュレーションしたときは壁際に寄せてしまった方がいいのではないかと思っていたが、調べているうちに本人の届かないところに置けば監禁しているのとかわらないということに気付いたのだ。想像どおり、高梨が車椅子に触れるのを佐藤は視線で追っていた。しかし少し場所を変えただけだとわかると、嬉しそうに目を細めた。
アヤトが隣に座る佐藤にしなだれかかる。
「あの、上と下、どちらがいいですか？」
「え？」
「えっと……その、正常位と騎乗位……みたいな……」
「あ……」
「僕はどちらでも」
アヤトが頬を染めた。甘えるように佐藤の胸に頬をこすりつける。
「……すみません、疲れさせてしまうと思うんですけど――」
最後まで言わせず、アヤトが首を振った。
「全然。でも僕すごくイくの早いから、あきれないでくださいね」
二人がベッドに寝転んだ。どこにいようか悩んだが、見えるところ

にいてほしいと言われたのでアヤト側の壁際に立つ。
「触られたくないところとか、されて嫌なことはありますか？」
「何もないと思います。もしあったらそのときに言ってもいいですか」
「もちろんです。くすぐったいところとか、そういうのって人によってバラバラだから……嫌な思いをさせるかもなんて思わずに教えてくださいね」
うまいなと思った。言ってと言われたら言いにくいが、教えてと言われたら言いやすい。佐藤も同じように思ったのか、アヤトと同じように返した。
「ありがとうございます。アヤトくんも、何かあったら教えてください」
「はい。あ、じゃあ、キスは……」
アヤトがおずおずと訊くと佐藤は目を見開いた。
「お店でキス、してもいいんですか」
「しないんですか？」
「いや、その……」
驚きだけで喜んでいるようには見えなかった。アヤトもふふっと笑ってから、「キスは大切な人のために取っておいてくださいね」とフォローを入れる。
「今日は僕に任せて、たくさん気持ちよくなってください」
アヤトが佐藤の体に身を乗り上げた。体重をかけないように肘を使いながら、首筋から肩にかけてちゅっちゅと音を立てて甘いキスを施していく。アヤトの唇を使った愛撫には定評がある。高梨はしてほしいとは思わないが、さぞかし気持ちいいんだろうとぼんやりと眺めていると、強い視線を感じた。目を向けると、佐藤が強いまなざしで高梨を見つめていた。しかし目が合うとすぐにふいと離れていく。
（なんだ？　どうした……？）
不快なのだろうか。思わず佐藤の股間に目をやるが、そこは猛々しく反り返っている。単に、どうしたらいいのかわからず戸惑っているのだろうか。慣れるまでは愛撫を受けながら適度に返すという具合がわからないものだ。しかしそんな佐藤の様子に気付かないアヤトは――普通は二人きりなのだから、自分が愛撫している間に他の人と目を合わせているなんて考えるはずがない――乳首を口に含み、もう片方を指でクリクリとこねた。佐藤の表情が快感に歪む。熱い吐息が半開きの口から漏れているのが遠目からでもわかった。
「武弘さんっ……」
愛撫しながら自分も感じたのか、アヤトが腰を揺らして勃起をこす

り付ける。
「アヤトくん……かわいい」
「おちんちん、舐めてもいいですか……？」
「そんなことまで？」
本当にいいのかと尋ねる目で佐藤が高梨を見た。一つ頷いてやると、戸惑いながらも佐藤がアヤトの頭を撫でる。それを了承と受け取ったアヤトが、佐藤の股間に顔を埋めた。
「ぁ……」
「ン、おっき……」
アヤトが唾液を使い、水音を立てながらじゅぶじゅぶと味わうように舐める。その表情が恍惚としているのは、口内で感じているからだろう。アヤトは演技ではなくちゃんと感じる。勃起させるだけなら薬を使えば簡単だが、そうではないとちゃんとわかるからこそ人気があった。
「んっ……はむ、んむ……」
「アヤトくん……」
佐藤が悩ましげな表情を浮かべながらアヤトの頭を優しく撫でる。もしかしたら頭を押し込むようなことがあるかもしれないと思ったが、佐藤はただ与えられる快感に身を任せていた。
「はあっ……武弘さん、そろそろ……」
「あ……」
明らかに佐藤は戸惑っていた。口にそのまま出したかったのか。
「あ、口に出しますか？」
「え……」
「僕はそれでもいいんですけど……でももう一度すぐ勃起できそうですか？」
「あ……いや、今日は挿入はいいかな」
「え――」
「あ、違うよ、アヤトくんが嫌とかじゃなくて、なんかもう胸がいっぱいっていうか。入れさせてもらったらそのまま出ちゃいそうだし。もう一度首の辺りにキスをしてもらいながら……その、こすり付けてほしいな」
「わかりました」
アヤトが佐藤の首筋に顔を埋めると、佐藤はしっかりとその頭を抱きしめた。アヤトの腰が卑猥に揺れる。次第に、ゴリゴリと二人の勃起がこすれ合う音が聞こえてきそうなほど激しくなる。
「んっ、ふ、はぁん、んっ、」

アヤトの嬌声の間にちゅっちゅというリップ音が響く。
ネコではあるが、もちろん従業員の体や射精に興味はない。しかしなぜかタチであるはずの佐藤の射精を見たいと思った。佐藤の、初めての行為。
しかし、本当に入れなくていいのだろうか。相手の中に包まれることこそがオナニーとの違いなのに――いや、今日の佐藤は興奮が高まりすぎているのだ。また店に来てもらうことがあれば、そのときはきっと介助スタッフが苦笑してしまうほどがっつくに違いない。男とはそういう生き物だ。プライドが高く、どんなときでも見栄を張る。だから失敗を回避して、成功が確実な二度目以降で本性を出すのだ。
「あっ、あっ、んっ、ふ、ん……」
アヤトが控えめに喘ぐ。もうキスというより、肌に唇を押し付けているだけにも見えた。
「んっ……は、ぁ、きもち……？」
「うん、気持ちいいよ。アヤトくんの、すごく硬いね」
「あっ……武弘さんの方が硬いっ」
「そうかな？」
「んっあ、ごめ、なさっ、も、出ちゃうっ……」

〜〜〜

昼休み、山口と二人で屋上に上がる。今日は快晴。しかし気温が高いせいか誰もおらず貸し切りだ。でも日陰はとても涼しい。風が髪を撫でていくのを心地よく感じながら弁当を広げる。
しかしそんな爽やかな空気の中にいても、頭は一昨日のことでいっぱいになっていた。
恥ずかしかったけれど、アヤトのおかげで高梨に触れてもらうことができた。それに……すごく色っぽい表情を見ることができた。きっと勘違いだろうけれど、それでも求められているような気がしたのだ。その記憶だけで帰宅後、三回もペニスをいじってしまった。
「一昨日はどうだったんだ？」
「楽しかったよ」平静を装いながらお茶を飲む。
「遠足でも行ってきたのか」
山口が半眼の無表情で佐藤を見た。
「……気持ちいいことはしてないし」
「どういうことだよ？　店に行ったんだろ？」
「行ったよ。行ったけど、やっぱ高梨さんが好きなのにさ……他の人

とそういうことするっていうのが」
　本当はただ高梨と話せればいい。けれどタチコースで行くしかないし、少しでもそれらしい雰囲気を作らないとアヤトが高梨に叱られてしまう。お金を払って会う関係が嫌だなんて贅沢も言わないけれど、やっぱり少し切ない。
「じゃあネコとして行けばいいだろ」
「――え？」
　ぽかんとすると、山口も同じような顔をする。
「え、なに、気付いてなかったの？」
「いや、だってさ……」
「この間も入れなかったって言ってたじゃん」
「うん……」
　山口の言うとおりだ。入れるという行為をしなければタチでもネコでも関係がない。
「じゃあ別にネコってことで店に行って接客してもらえばいいじゃん」
「でもなぁ……」
　アヤトは親身になって相談にのってくれている。一昨日は気を遣って二人きりにしてくれたことを話すと、そこまでするほど応援してくれてるんだったら最初から二人になればアヤトくんも嬉しいんじゃないの？　と正論を返された。
「ほんとマジでめちゃくちゃ山口さんの言うとおりです」
　すとんと落ちすぎて、食欲も感じなくなってしまった。だって、二人で会えるかもしれない。
「次の予約は？」
「一週間後……」
「変更してもらえば？」
「電話で？」
「メールでできるんだったらそれでもいいと思うけど」
「多分できないと思う……」
　というより、文章では説明しにくい。
「じゃあ電話だ」
「本人に？」
「受付の人にアヤト指名でタチとして行ってたけど、やっぱりネコで高梨さんに接客してほしいって言えるんだったらそれでいいと思うけど」
「無理……」

「なにそのプライド」
「プライドっていうか恥ずかしいじゃん……」
「俺は好きな人に見られながら他の子とイチャイチャしてイく方が恥ずかしいと思うけど」
今から電話で高梨を指名する――そう思うだけで吐きそうなほど緊張しているのに、山口の軽口のおかげで少し気分が楽になる。
「山口さんだって恋人の前でイくでしょ」
「そりゃそうだけど。でも一緒に気持ちいいことしててイくのと、ただ見られてるだけっていうのは全然ちげーじゃん」
「今日はズバズバ言うね」
「人の悩みは蜜の味」
はぁとため息をついた瞬間、卵焼きを奪われた。甘口で焦げもなくきれいな明るい黄色に焼けたのに。
「料理上手なところはネコっぽいんだけどな」
「今時そんなこと言ったら大ブーイングだよ」
「なんで」
「ネコ＝女の役割。女＝料理」
「言えてる」
はあ……と二人同時にため息をついた。
「世知辛いな」
「いいじゃん。自分は彼氏いるんだから」
「そりゃあ告白したからな」
「なんで告白できんの？　恥ずかしくなかったの？」
「その質問中学生かよ」
「真面目に訊いてるの！」
「……恥ずかしいより好きって気持ちが勝ったからかな」
「なんかめっちゃ深いこと言ってる……」
告白なんて恥ずかしいし……何より怖い。ふられるだろうし、そうなったらもう会えなくなってしまう。そうなるくらいなら、好きって気持ちを隠しながら近くにいられる方が幸せだろうに。
「んー……恥ずかしいとかふられるのが怖いとか、そんなことを思ってるうちに他のやつに取られるかもって思ったらいてもたってもいられなくなったっていう感じかな」
「他の人に取られる……」
「高梨さんイケメンだし。従業員も客も全員ゲイだろ？　より取り見取りじゃん」
「それはそうかもしれないけど……恋人はいないってアヤトくんが

教えてくれた」
　ベッドの中で、こっそり話してくれたのだ。もう長いこと恋人はいなくて、一人暮らしで、ご飯はいつも外に食べに行くのでたぶんあんまり家庭的なタイプじゃないと思う――言える範囲で、知っていることを教えてくれた。
「優秀じゃん、アヤトくん」
「すっごくいい子。かわいいし優しいし」
「でもさあ、それでもああいうタチっぽい高梨さんがいいんでしょ」
「うん……」
「抱きたいと思う？」
「足さえあれば」
　弁当箱で、すっぽり隠れてしまう足。今は義足をつけているからそんなこともできるけれど、外してしまえば空いた右足部分に置けてしまう。
「なくたってできるじゃん」
「え、どうやって？　義足？」
「上に乗ってもらえばいい」
「ああ……」
　それはこの一か月、何度も何度も想像した。自分の腰にまたがった高梨が、佐藤のペニスを後ろ手で持ってゆっくり腰を下ろしていく。頭を上げて腹の方を見れば、自分の勃起が高梨の陰部に飲み込まれていくところや、高梨が本当は入れたくてたまらないはずのペニスを持て余しているところもすべて丸見えで――そこまでで、いつも妄想は止まってしまう。男らしくてかっこいい高梨がタチであるという趣向を超えて佐藤の勃起を受け入れてくれる……そう思った瞬間に、白い液体が飛んでしまうのだ。
「それとも、自分が上がいい？」
「いや、別に下でもいいんだけど……。でもさあ……準備も片付けも何もしてあげられないし」
　やっぱり理想は、これまでゲイビデオで見たような行為だ。許してもらえれば準備を手伝いたいし、それがだめでも準備で疲れた体を抱きしめてあげたい。相手の快楽を優先して、長く行為を楽しんで、終わったら体を拭いてあげて、抱きしめて寝たい。
　でも現実の佐藤は準備や片付けをスムーズにしてやることは難しいし、おそらく体力的にも自分の方が先にぐったりしてしまうだろう。実際、初めて店に行った日の夜は精神的疲労もあって寝込んでしまった。だから予約を入れられるのは、翌日が休みである土曜日だけだ。

「まあ客にしろ恋人になった後のことにしろさ、そういうの全部分かった上でするんじゃん。差別する意味はないけど、できることとできないことがあるって相手もわかってるんだから気にしなくていいと思うけど」
「そうかもしれないけどさ……」
自分が、したいのだ。きっと高梨は何も求めない。恋人になった後の姿なんて想像もつかないけれど、少なくとも店に客として行っている間は「仕事だから」余計に何かをさせようとすることはないだろう。
「じゃあお前はさ、もし高梨さんが急に目が見えないとか手が動かないとかそういうふうになったらやっぱ無理だわってなるの？」
「え？　なんで？　何の話？　ならないよ。むしろ世話してあげたいと思う」
「好きになるってそういうもんなんじゃないの」
「そうかもしれないけどさ……」
いい人だからこそ、好きだとは言いづらい。佐藤はただの客の一人で、嫌な言い方をすれば金なのだ。それなのに好きだなんて――高梨は仕事だからふることもできずに返事に窮することだろう。

〜〜〜〜

「……武弘くん」
「ぁ……」
拳の上に、きれいな手がのせられた。ざらつきのない親指が、そっと佐藤の手の甲を撫でる。
「っ……」
「――次は少しデリケートな質問をよろしいですか」
「ぁ……」
高梨のまとう空気が変わった。ねっとりした、淫靡な雰囲気。まるで今から言葉責めを始めますと言われているような気分になる。
「……はい。俺に答えられることだったら」
どんなことを訊かれるのだろう。人がいるようなところではできない話――。
「今のところ挿入を希望されたことはありませんが、入れたいと思うことはないんですか」
「ぁ……それは――」
ある。もちろんある。頭の中では毎日何時間も高梨のアナルにペニスを咥えてもらっている。

「それは？」
「あります、けど……」
そもそも店を探したのはそのためだった、と恥を忍んで伝えると、高梨は目を細めて頷いた。
「では踏み切れないのはなぜでしょうか」
どうしてそんなことを訊くのだろう。指名したい、抱きたいと思う相手がタチだから挿入できないだけなのに。
どう答えるべきか思案に暮れていると高梨が続けた。
「前回は私をご指名いただきましたが、初回とその次はアヤトをご指名でしたよね。何か理由があって踏み切れなかったんでしょうか」
「いや、そういうわけじゃ」
「そうですか。もしかしたら挿入に手伝いが必要で、でもその申し出がしにくくて踏み出せずにいらっしゃるのかなと勝手に推測していました」
「あ――受傷する前にそういう経験がある人の中には、そう思う人もいるかもしれません」
「では……武弘くんは単に未経験の時間が長かったから臆病になっているんですね」
ストレートな言葉責めだった。顔が熱い。恥ずかしい。
「体に不自由がなくても初めてが遅くなればなるほど男は失敗を恐れて臆病になるものです。そこに四肢の不自由が加わってしまうと、より怖くなってしまいますよね」
「ちがっ……」
自分はそうじゃない――いや、それもあるのかもしれないけれど、少なくとも佐藤は「入れたい」というより「入れさせてほしい」と思っている。そこには大きな違いがあって、言葉を変えれば「自ら入れたい」んじゃなく「高梨に咥えてほしい」のだ。だから手伝いがどうとか、うまく挿入できなかったらどうしようなんて不安は――今はない。
（暴発するのは嫌だけど……イくのが早いってことはバレてるし……）
「私たちに何かできることはないんでしょうか」
「え？」
「プレイヤーから聞いただけなんですが、なかなか勃起ができないお客様がいらっしゃったときは裸で寄り添って、キスや手を使った愛撫で時間をかけて緊張をほぐすんだそうです。時間の制限があって難しいところもあるようなんですが、最後には勃起できたことを二人で喜

んで、射精とはまた違った達成感があった、というようなことを言っておりました」
「はい……？」
いったい何が言いたいのだろう。相槌を入れながら先を促す。
「武弘くんはきちんと勃起もできますし、素直に快感を受け入れることができています。それなのにアヤトに入れようとしなかったのは慣れの問題で――」
「あ、あの……」
思わず口を挟んでしまった。だって高梨の口ぶりから、アヤトへの挿入練習のために高梨を選んだと誤解されているような気がしたのだ。
「はい」
「その、俺がアヤトくんに入れたいと思わなかったのは……その、入れたいって思う人が違う人だから……」
どうしよう。これはこのまま告白してしまう流れだろうか。言いたい。好きだと言ってしまいたいという気になっている。でも言ったら……窓には強雨が当たっている。帰り、高梨は送ると言ってくれるだろう。でも狭い車内で気まずいままなんて耐えられない。でもこの流れはチャンスかもしれない――でも……。
「そうでしたか。唇と同様、大切にしておきたい相手がいるんですね」
「……はい」
顔が熱い。どんな表情をしたらいいのかわからない。目をぎゅっとつぶると、拳をまた撫でられた。
「その人に、大事なところを捧げるんですね」
「……捧げるなんて……そんな大したあれじゃ……」
「そうでしょう。唇もペニスも大切な……いやらしいところですよね」
「ぁ……」
ペニスに血が集まり始める。緊張で勃起なんてできないような心境のはずなのに。まるで高梨の声や言葉がトリガーになっているみたい。
「どうやって渡すんですか？　その人のために枕や布団を使って腰を振る練習をしているんですか？」
「そんなことっ……！」
夢の中では足があって、自由に歩けてセックスだってできて……でも目が覚めた後は絶望の中で、それでも高梨が上に乗って腰を振っているところ想像する。そうすると、夢を引きずる不快感から解放される。
「ではどうやって？」

恥ずかしい。けれど高梨は仕事のために訊いているのだ。佐藤が紹介した人はみんな足が不自由だったから、きっと挿入方法について知りたいのだ。
「上、に……」
「ああ、乗ってもらうんですね。勃起したペニスを掴まれて好き勝手使われて……もしかしたら相手がイくまで射精は許されないかもしれませんね」
「ぁ……ぁ……」
ペニスが痛い。だって何度も想像してきたことを高梨の口から言われるなんて。「イくのが早すぎるから、イかない練習をしないといけませんね」なんて言われて、イきたくてたまらないのに刺激を止められたりして……そういうことを何度も何度も想像して、何度も何度も射精した。
「キスは――初めてのキスはどうやってするんですか」
「キス？」
「武弘くんから相手を引き寄せて唇を擦り付けあって舌を絡めて唾液を交換して――」
「ぁっ、あ、だめ、やめて……ください……」

9万5千字です。
ハピエンです！　よろしくお願いいたします。

二輪の恋　―サンプル―
gooneone（ぐーわんわん）
2022/ 4/ 15
メール:gooneonegooneone@gmail.com
pixiv：19591291
Twitter:@gooneone11